

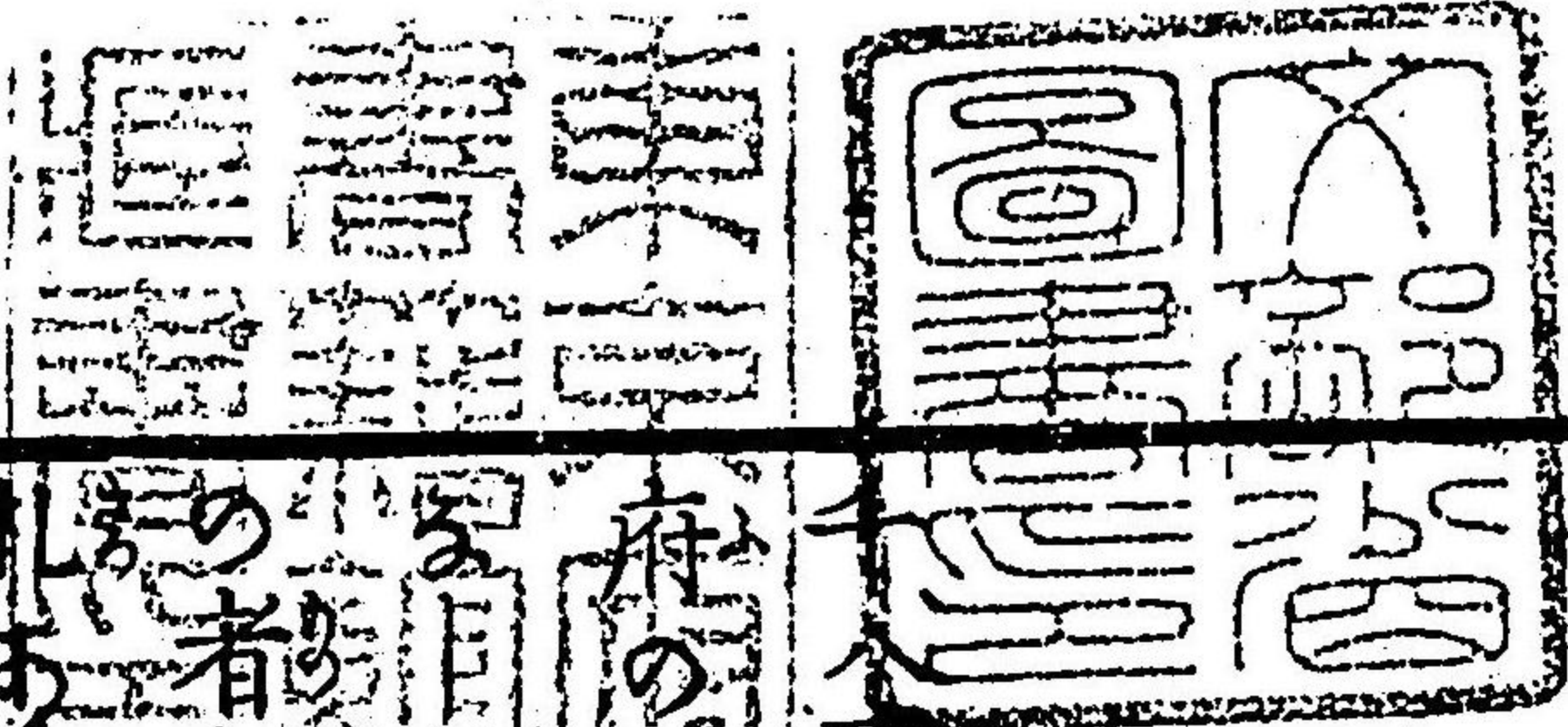
西洋新書 第六編下

特31

671

古本

特31  
671



西洋新書第六編卷之下

東京

瓜生政和著述

百七十年十一月三日み至り去る十月三十一日巴黎斯  
府の人民激動あり政府み迫りより衆議紛々として確定  
を困難なれば政府の改革を致し宜しき事又悪き事と府下一同  
の者み入札させ二十街の一街として重立しその出席を是を開  
札ありたるよ改革致悪しと云ふ者五十五万七千五百六人改革致  
悪しと云ふ者六万二千六百三十八人あり然れば諸官貞と其

西洋新書

第六編卷之下

一置を可と為るゝ十分の九ある故改革為さるゝ一も落着  
一激徒やうやく收りたり

日本の一学士渡氏云ふ余情事情茲觀察する方今宇内  
万邦中文明開化ふして富強強併せ有つもの最由歐亞中  
多し就中仏國の如き文明万国小東ける一大強國ふま  
余等嘗て我が皇國よ在る其國人材小富と文教武備の  
諸國小勝きたると羨と思ひしと既小久し然るも今其都  
在りて其國の長技とまる陸戦と親しく視まゝその國の典  
社稷存亡の機至るの日み逢り戦鬪勝敗の如きハ姑く舍て  
言む今廟堂草野の状態と觀る小國家の存亡旦夕小逼り

城門の外ハ無數の梟敵充滿一日夜その隙を窺ふ時  
諸民力疲戮せ心を同うして専ら防禦の法術を施ま  
却て政府の改革と謀り遠く小府内の人民を動搖せし  
弟牆小閱るの内乱叛變さんと狂乎愚乎抑賊乎余等  
こそその目的を解せざんば嘆む一國の幹柱礎石たる報國  
節義の心ありまば弊風やもすると波濤の如く激動一暴艦  
船が覆へさんとほ余今獨竊小嘆む文明開化の極その及む  
ざるよ近かつむと哀くる

同七月歐羅巴の四大強國と呼きたる英吉利魯西亞奧地利  
伊太里の宰相を始め仏國の宰相ハールブル及び「チエール」ら普

國の本陣「ウエルサイル城」集會し普の宰相「ビスマルク」と會合して和議を謀りたるとも普國はこれを承引せざるに因て四ヶ國の宰相らも口と窄め手を空しくし控へられ和睦の談判調はゞ仏國の使節「バアブル」チエールの兩將を「ウエルサイル」に辭し巴黎斯へ戻り事の由を告ぐるゆゑ府内の諸民ふくび和平の望を絶えざる戦争と決議せしむるに更し諸方の手配り定め市兵の階級をよりく五等とをせ即ち第一等進撃隊は年齢より關係らば自ら戦闘と爲んと望み出たるの第二等防戦隊は二十歳以上三十五歳までより妻子と持ざる者第三等防戦隊は三十五歳以上四

十五歳までより妻子と持ざるの第四等防戦隊は二十歳以上三十歳までより妻子と持しりの第五等守衛隊は三十五歳以上四十五歳までより妻子と持し者と定めしが後三日を経て再び布令し二十五歳以上三十五歳までの者ハ上下産業の差別なく守衛隊の中へ組入るは防戦の時若し手負討死し及ぶその家族を政府より扶助致さべしとの沙汰あり

府内の形勢かく切迫し至りければ在留あり居たる英吉利その他外國人言ひ合せ三百人餘の程普佛兩軍中の通行切手を乞へて巴黎斯の町を立退きたり

巴黎斯府内ノ普國の間諜多ク多く潛之居るより聞えられ  
 是は穿鑿するに密あり一ガ「オベラコシツク」と云る劇場  
 のかきりて一人の女を捕ふ是はすまじら敵軍のまへ者  
 とぞ其後まへ府内を流し徹る塞納河の水中に栓と刺たる  
 硝子の徳利漂ひ往來見て是を採り上げ壘の中を改めたる  
 一府内の事情を記したる數通の密書故とあ置ぬ正しく  
 普魯士がとの間者の仕業ふして塞納河の水下より普軍の  
 陣営多き故ありよの壘と見出せしと西三度及びババのく  
 穿議我嚴みに此後多の間諜と三人まをぞ捕えたる普國  
 ろくハ始め軍と向けざるうち老若男女童幼の差別なく

巴黎斯府内の情態残るべく  
 探り知んが為よ間諜残入れ置  
 きしと斯の如し是は彼の謀  
 將「ビスマルク」が為まところ  
 となん

然れば巴黎斯府内よりハ筆  
 城後諸郡縣との書翰贈答ハ  
 まへく彼の使鳩を以て為し  
 る故普の間者おと残え即  
 「ビスマルク」小告られバ普軍

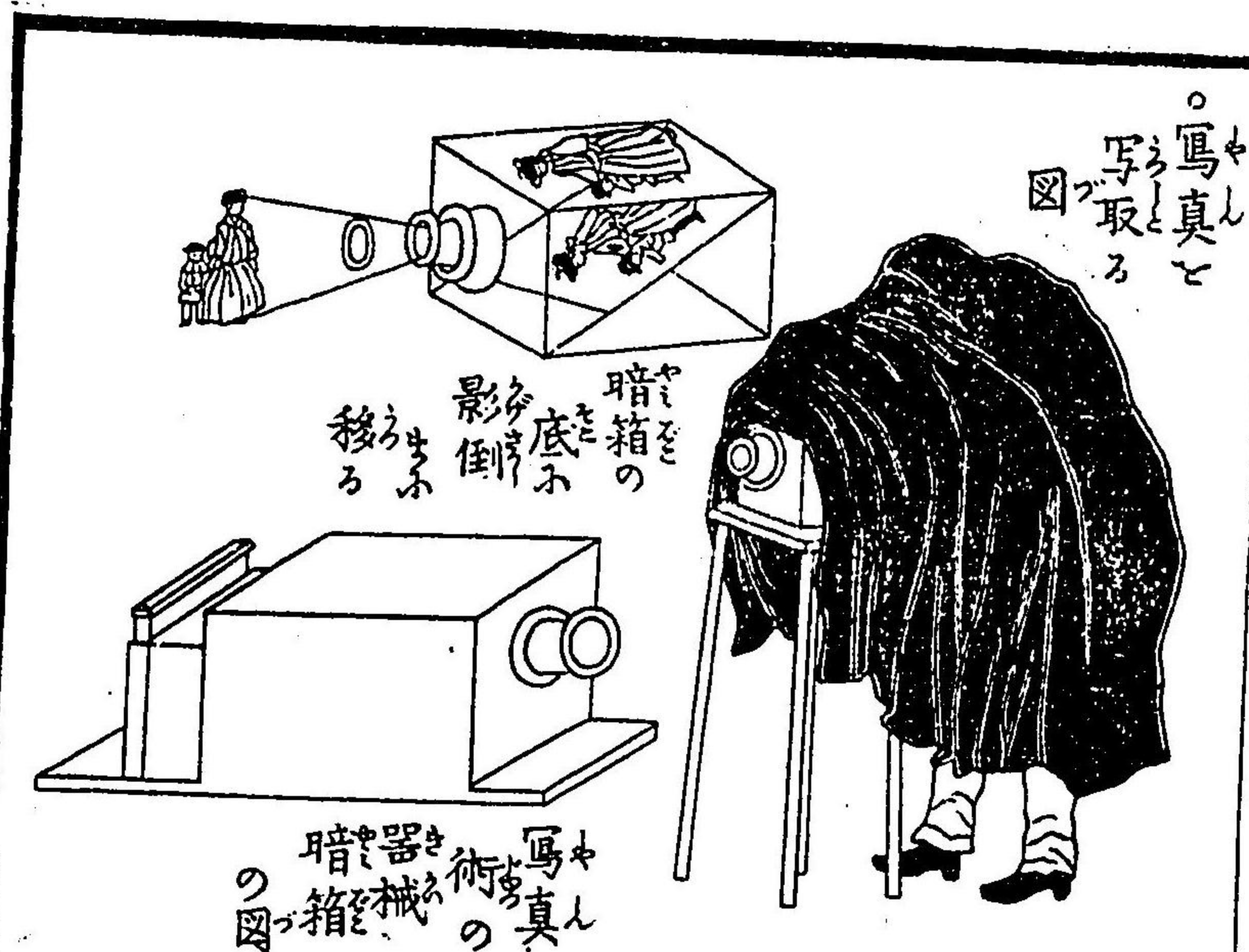


ふくハ巴黎斯府の周圍ある林園の中へ多くの鷹鷂を  
 置き使鳩を捕えさせんと為りたり  
 此程に至りツール縣および他の諸郡縣より巴黎斯へ贈  
 る書翰あるひ日誌などいよく密に成り薄き紙に寫真  
 ておとと縮め目方と嵩と減たなる上使鳩の首よりハ羽  
 翼の下に結び付け放ち巴黎斯の府内へ贈り鳩密使  
 為りて大り便利を得たるより人々始めその緊要たる  
 小驚きゆくり爰を以て今諸方より贈るところの書翰日誌  
 咸く寫真の物を用也  
 寫真鏡ハ彼の千五百七十八年のころみや有りらん以太利

忍の内那不勒國の人「ホルタ」と云ふの始めて箱のうちに  
 不透明玻璃の板と置きあつた物影を寫し筆めて書取ると  
 茲發明せりあの箱を暗箱と云ひ最初あつたと寫真鏡と  
 稱せりあり

然ととも暗箱の中みく模寫する方みくハ筆を労するのと  
 あつて画の出来る者みくづれば為り難く故み猶便利  
 なることを求め得んと欲し西洋各國の究理学者のつとむ茲  
 小工夫を費しぬ然るふ千七百六十四年今より百十年ほど  
 前小伊太利國ある有名の化学者「セーレ」と云ひ一人「コロ  
 ル銀日の光を觸ると忽ち色を變るとハ發明せり

写真と  
写取る



「コロール銀ハ銀と溶して製  
 したる物なり  
 その後諸國の究理学者ら此  
 「コロール銀」の光りみ逢ハ  
 感ト易キ基づキ何れも  
 有用の技小施さんと工夫  
 廻ら居たり一八千八百十四  
 年今より六十年前小仏蘭西  
 の究理家「ニセポール・ニーフス  
 と云ふの始り「ポルタ氏

の暗箱を用ひ筆と持とて「コロール銀」より画像と寫  
 一取るの妙と考へ附たほど未だ全き物に至ると能は  
 へ尚十二年後過せし後同國の学士「ダギユール」と云ふ人と  
 謀り始めく玻璃板あるひの銅板に画像を寫し止むるの術  
 を得たり然れども僅ふその術と現はまざるゆゑ世に  
 公許よまる程の物ありざりし後今より三十五年前に至り  
 遂に「ニーフス」と「ダギユール」の二人して困苦の功を積み銀板  
 写真の術と大成せしや此法を多く「ダギユール」の工夫  
 成就せしゆゑ是れ「ダギユール・ニーフス」と名けたり  
 又同時代に「ホルリス」タルボットと云ふ人も暗箱の中を紙

の面は画像と寫し出まことと發明する名けく「タルボティヒ」と云ふをよみ續きて「ニセホール。ニープスの罫ある」コシント。ピクトルと云ふ者玻璃板に鶏卵の白身かよび銀液を塗りて画像と移し止むると紙製し出しぬ是を「ニープソティヒ」と名づく斯の如く諸方の究理家新方と考へ探りて鮮明な画像を移し取らんといふ求むるといふことを猶未とすその宜しき紙極むると紙のむく移し取りたる画圖明らある所と暗き所の分界判然ありといふを然して衣服左衽ふあり文字を寫しても背面の象とある等の不都合ありといふ諸家強に之を全良の法を講究ありたりといふ今より二十七年前

瑞士國の究理家「センバイン」と云ふ人と日耳曼國の究理家「ベツチユル」と云ふ人と二人の工夫する綿花紙用ひ火薬の代りと成るべき物を發明する是を名けく火綿と云ひ俗に綿箔消と唱ふ當時の化学家と云ふもの火綿もこの紙混と製法を「寫真の術」用ゆるあり火綿と用ゆるは夥して鮮明なる図を寫し出し是れその物の及ぶべき小有らば爰に於て猶三四年の経験より「アルセル」と云ふ人よ至り「コロチオン」寫真の方全く備へるその以前も數十「セコンド」乃至幾多「ミニユード」にして成りし画像はつらみ四五「セコンド」紙以て成就するまでと成り爰に



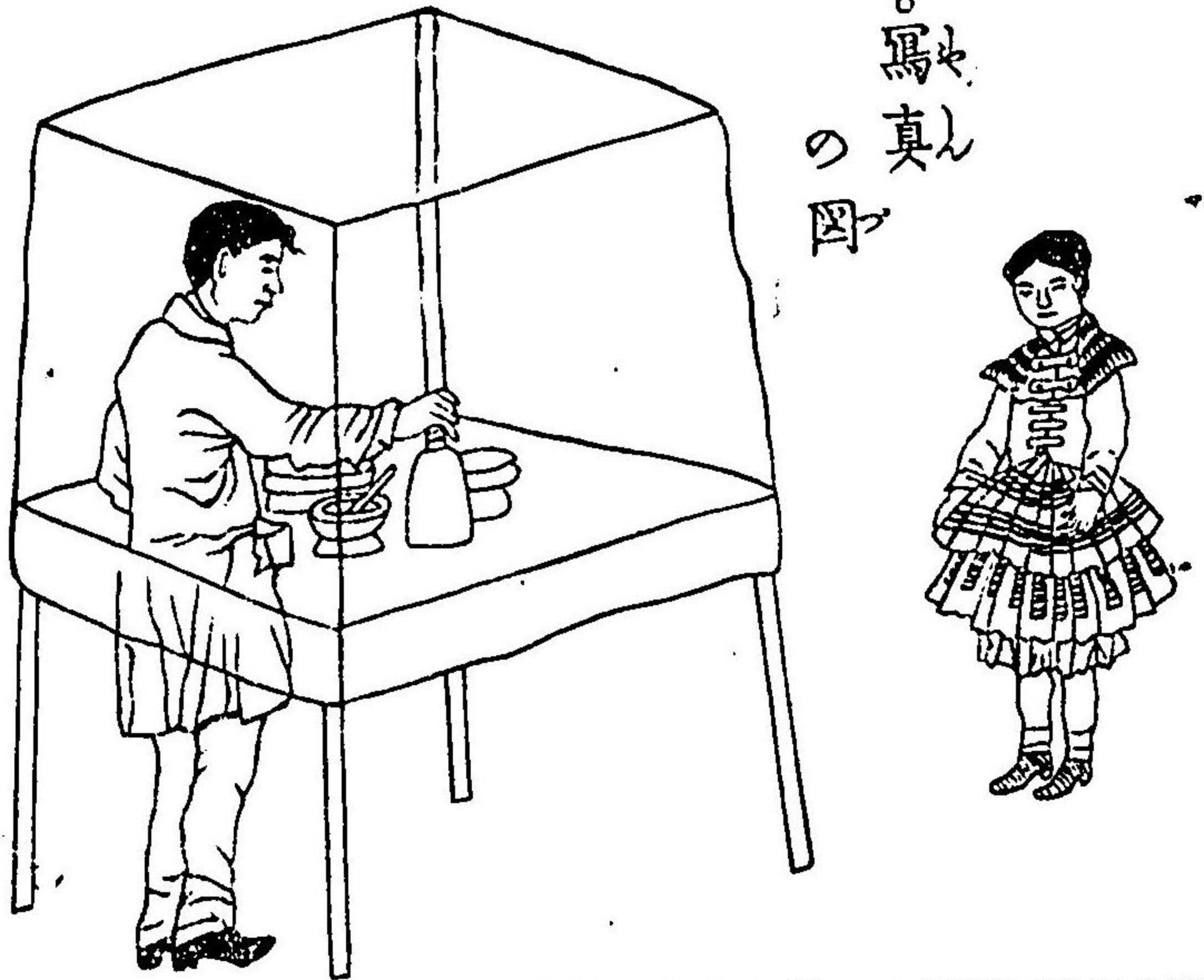
於て「コロチオン」寫真の方被稱して世の人「アルセロチイ  
 ヒー」と云ふ「ダギユーレオチイヒー」ナルホテイピー「ニー  
 フソテイピー」アルセロチイヒーなど皆その發明せし人の  
 名に因りて附たるものあり此諸術被總稱して「フラトガ  
 ラピー」と云ふ「フラトガラピー」といふ希臘國の語より  
 希臘の光を「フラト」と云ひ書寫を「ガラ」ガラホと  
 云ふこの二ツの語を合まれば即光りの力に依りて図を寫  
 す術と云ふ意とある是を我が國語に翻譯して寫真術  
 と唱ふるあり

尚寫真の取り方有用の藥品の大概被も記さんと為す

きど事繁多めて容易に  
 解る難ければ次編に讓  
 りておまゝく爰に畧と  
 先達て十月三十日巴黎斯の  
 市街へ農商全権より布令お  
 下す

巴黎斯籠城をひく久し  
 至り住民は給まら魚類を  
 を以て近日府内の諸湖河  
 池泉水とて小網を入れ漁獵

寫真の図



つづきの可き事

市中食料の馬肉拂方の儀七日目毎各所會社へ馬八百頭残率出馬醫あはれ検査よ及びその中みく病馬あるひも悪疾ありのを除き六百頭づを以て食糧拂ひ出まんき事

ふど有りーグ此程ふ至りまへ府内の食糧いよく乏しく成マフ付人々猫を殺し食しられた十一月十一日よへその皮の數既一ニ万七千五百三十三枚ありと「オテルドール館」よ書出したる然れども府内の家々み飼ふところの猫の數猶二十五万頭よ下らむとまん斯の如くあれバ近ごろ犬猫と屠

る者出来てその肉販商ふ店張所々み開くを兵隊の毛所ふとみくへ専ら犬を料理て食とあま者多きふりしを犬猫と愛ま人々を是を家の構へうちみ秘し置き道路へ出ましと紙大りみ禁トぬ然も有るべきや當時猫一頭の價あふりしを一兩三分あり又ある豪富の商人府内ある蓄獸園よて野猪の子二頭を求めし其價金三十五圓ありしとぞ十二日の日誌中み

牛肉 絶々無し 塩漬の豚の肉一斤 金三圓一分

馬の肉一斤 金一分二朱 驢馬の肉一斤 金一圓一分

鵝鳥一羽 金五圓 鶏一羽 金三圓

鳩一番 金二圓二分 カラケ鳥一羽 金十一圓

鬼一匹	金三圓二分	鯉一尾	金四圓
鶏卵十二	金三分三朱	葫蘿蔔一把	金一分三朱
サヤ豆一升	金一圓	牛酪一升	金九圓
牛酪塩入一升	金二圓二分		

その後猶籠城の日數八九十日ありみ至りての食料の肉尽く尽くみより政府ゆく貯へ置たる塩漬の獣肉および塩魚を食せし市中は割り配り市中の者らへもあつて犬猫を屠りし鼠を捕へて食ふと甚し馬車も遣ひ馬もすてみ殺し屠りたるを普く市中の者も往渡るほどみ至らぬ

屠者及び獸肉商人等も令りて乾魚および塩魚の類をも

賣りめたり然るも十二月九日十日に至り麵包を商ふ家もてゑみ戸を鎖め商賣を為さぬ成りたるも町々へ一般に傳え聞へし市中の人民ら一時大に動揺し府内の穀物も乏み尽たりとて老幼婦女子巷み叫び騷擾するも甚し是も因りて急み政府より布令を出し

今時かく諸色拂底よ及ぶと人ども麵包の分量の定めりし望もみ任せと商ハハむさば人々宜しくその意を得動乱為ると勿らるる穀類も於ては政府の蓄へ充分ある故更み缺乏の憂ひ有とる

と成りしれバ市中の人民やうやく静謐よ及びぬ然もども

肉類小至りとの殆ど絶たるふ齊一なれば犬の肉を以て上等の食料とする故犬の股の肉一枝の價一兩二分三朱よりのみて鼠一匹の肉の價金一分に至る十二月廿五日の日誌中み昨日一商人が孫て貯へ置たる鶏卵を賣し小數千ありて價一千二十三フラン小買ぬ一ツの鶏卵の代金三朱と三百文小當るその高直實小驚くべし此節小及びびるへ野菜の類一切切り斯の如くあるは府内の商人の中ゆく猶穴藏の底小塩漬の獸肉など幾多く蓄へ隠し置しと市中巡邏の者小見出さるるごとく罰を蒙る比ひの小事甚ど多し又その前十月三十日小市街總督よりの布令小

籠城中家々小く點まるところの瓦斯燈ハ毎夜その半減し二嘴の管燈も一嘴残用のべしと諸店も休息所とするの燈火を夜十時半に至らば減く消しと費を減ぜべし

右違犯よ及ぶ輩ハ曲事よ處せらるるべし

まどの沙汰有りしが十二月三十日ごろより府内の瓦斯をひよ尽たると石炭元より乏しなれば往來の常夜燈も石腦油残用の故市街の道路朦朧として暗く家々の内ハ夜十時半より減く消させたり然るも十二月小入りてハ倍石炭尽るるめぞ政府よりの布令と出し

政府は貯へ置し石炭殆ど尽んと然れども鉄炮鑄立の  
 石炭は限り薪炭とりの物みよ其用は當りかごと故  
 市中の内は石炭を貯へ持しものも政府へ持ち出べし  
 定の價を以て是を買上ぐべし若し隠して蓄へ置ば夫々の  
 罰金を出させ罪科み處せらるべきあり

巴黎斯の景勢をみ斯の如く内は食料物品をく周圍は數  
 万の梟敵あり然し外は諸郡縣の援け至らざるも猶日曜  
 日への屈竟の男子ら美服を着し妻女の手を携え市街の  
 辻を散歩遊行して居るもの甚ど多く幾千人あると知らざ  
 輩のよみ仏國殆ど敵の掌中み陥らんとし滅亡且夕み逼り其



○巴黎斯  
 籠城中は  
 遊人あり

危ふた支實は朝  
 の露の如くある  
 知らざる者み似し  
 法普戦争誌畧み  
 云ふ巴黎斯の人  
 への飾り旅專らと  
 言語を巧み  
 常は國事と罵れど  
 も内は報國の赤心  
 あり故危急は控ん

其國政顧りたるが如きの薄節我が徒の眼目をして驚愕せしむト實み日の本人の心よくも然思へるも道理ありたり

爰ふまゝ大統領トロシユと普王の本陣「ウエルサイル」於て四強國の宰相らが會議の和睦も破れ仏國諸郡縣よりの援兵も出来らば只外郭に於て日々敵味方銃隊と接へ戦争小およぶと雖も勝敗を決する程小至らざるも自身敵に向ひたるは去る十月二十日より廿三日まで三日の間の合戦のさみく是とも果敢々々かろざりしう此度は是非とも一戦の本小雌雄を決し若し勝つと得べしとされは生て再

度巴黎斯府内へ戻るまゝと心よ決し十一月二十七日より頻りに市兵隊操出し同二十八日より自身も郭外へ出張まゝに此日市中に布令して

今般籠城中府内の人民とて市兵隊と成りぬ依りて是れも當人へ手宛として日々金一分一朱ツ與え置きしが今日より市兵隊たる者の妻子も手宛として日々金二朱ツと與へべきものあり

ト是ハ物價高直ある故以て貧民の活計を佐くべき為ありとぞ

再說大統領「ドロシユ」ハ巴黎斯郭外ある「ロジヤン」城迄

出張あり大い諸方の手配り決定同廿九日曉第三時大砲一發夷るや兵相圖と一三軍の隊列を操出し自ら陣頭に進んで普軍の各寨へ攻めり大い戦闘を開きたり爰に於て普魯士方も第一軍の將帥「ウオングーベン」第二軍の將帥「フレデリツキ」シヤル、第三軍の將帥「普」の太子「フレデリツキ」維廉など同ト兵隊進め来り終日戦ひ兵結びたると雌雄を決するほどの劇烈に至らるる夕ふ及び物分れと成り同三十日再度曉三時より彼の三兵隊操り出し普國の軍へ攻めり謀將「ビスマルク」が分配の陣立あるみ公子「フレデリツキ」シル、もと能兵隊指揮して戦ひる故の

日も雌雄を決しカスパーが兵將「トロシユ」一世の勇と此所も現は頻りみ下知して攻たて双方の死傷をみるに多し然るにバタ四時のある普國の先鋒將軍「ウオングーベン」が隊伍を引く陣を退けしむ兵隊より其地に進み嚴しく追討するに普の先鋒隊大いに敗れ討死手負を棄置して咸く逃散りぬ爰に於て仏蘭西方大砲二門を多捕りし士卒七十二人の囚虜を得たり然れども味方の死傷も多し仏の一軍普軍の逃去りたる地へ陣を轉じ威勢やうやく震ひたり十二月一日より小羅合のありし故猶所々へ陣営を布き配り且終日味方の討死をせしもの兵埋葬し

及びぬ同二日の拂曉、普國の先鋒將帥「ウオングーベン」ニ  
 軍の將帥「フレデリツキシヤル」、三軍の將帥「フレデリツキ  
 維廉」四軍の將帥「サキス王の太子五軍の將帥「ゼネラルマ  
 ントウヘル」などの大軍潮の湧ぐ如き勢ひあり、仏國の先鋒  
 將帥「ゼネラルジユクローグ」陣營を攻めると猛烈あり  
 然れども、仏國西方の防禦の手當十分備りたりける故  
 各隊の兵士要害を據り、數十門の大砲を込替々々うち出せり  
 特よその戦地の郭外十六城の内「アブロン城」「ノジヤン城」  
 「ペーサンデリー」「グラマル城」「サンムール城」及び「ノジヤラント  
 ン城」などの間に入りて取り、ノジヤン城より大統領「ドロ

シユ出張るに居る故、おの各寨中より烈しく大小砲をうち  
 出、敵の進撃を挫くんと、普軍も屢々の要害を戦ひ、能く  
 その地理を知りなれば、是に抗する手術と見え、多く歩兵よ  
 り、森林中を埋伏し、樹木を小楯とし、砲を發せると、夥しきの  
 旅見て、仏國西方「ゼネラルイノアー」「グレマントマス」の兩  
 將ハ旗下の市兵三十三大隊を繰り出し、普國の中軍「フレ  
 デリツキシヤル」「フレデリツキ 維廉」の隊列へ撃たれ、仏  
 將「ゼネラル」ホーホル及び「リユエール」の兩將も、兵  
 列を操出し、諸方同時より軍をどり、戦ひのめども劇烈な  
 り、その日普軍めくは是非一寨城を抜んと誓ひ、仏軍ハ普



の陣營をうち破り追拂さんと決したる故實は近日の一  
 大戦ありて双方より打出た大小砲の響き輪々として山林  
 小震ひ火薬の黒煙勃々として中天を掩ふ大砲の雷の如く  
 一夷き落ち小銃も霰も齊くたるをいり飛ぶなど西軍と  
 も一面を向くべき様も無し然るに仙軍先鋒中の勇將を  
 ネラルレナウルトのみの弾丸をともせし自身真先を進  
 一戦隊を引きつぐ疾風の如く走りて直に普軍へ撃  
 ちかしの先鋒の大將「ソオングーベンゲ」軍隊を追ひけ  
 戦力の弱とも盛大ありしが敵より打出た弾丸も「レナウ  
 ルト」の右の股を抜れたるうへ猶數ヶ所は手と負ひつとも

重傷ありたれば隊下の兵士も助け直し病院へ送りたれ  
 ども療養協へむ仙國有名の剛將ありしも竟し翌日死去  
 しぬ時は六十二歳と云ふ

同月七日の「ゼネラルレナウルト」の亡骸は「巴黎斯府」  
 内「アンワリード」の地の寺院へ官より厚く葬式を  
 たり

まづ佛の大將「セネラル」ラドレイの普の五軍隊「セネ  
 ラル」マントウヘルの陣營を打ちやぶる猶先頭に進んて勢  
 ひの弱とも猛烈ありし敵兵森林の中を潜り居て雨の  
 如く打ちつた弾丸二發を受け馬より落ちて即死ありたり

「セネラル。バチユール及び「ボワツンネー」コロネル官  
 カラニセーなどの人々ハ普の大將「ウオンゲーベン」の公  
 子「フレデリツキ。シヤル」らが軍隊ふらぐ大りは是と  
 攻戦ひ「バチユール」ボワツンネーの兩將とのみ手疵と  
 負ひたれバ整く退く病院に入り「コロネル官」ガラン  
 セーを流丸よ當りて死せ又仏の先鋒總督「セネラル」  
 ジュクローグ旗下ゆき「コロネル官」ビリエール同官曰  
 ネラルなど討死あり終日の苦戦みよさきも普軍の猛  
 烈ありを終よ成く追返りのみく戦威を震ひたり此日  
 仏軍の討死將帥及び士官の人々七十二名手負三百四十

二名本務兵民兵市兵の三兵  
 を合せく兵卒の討死九百三十  
 六名手負四千六百八十名総計  
 五千零二十二名討死の將卒千  
 零八十人手負の將卒五千零  
 二十二名死傷死合せて六千百  
 二人とを録する然れば普軍  
 の討死も是ふ倍して夥多し  
 既ふこの日仏軍ふ生捕るもの  
 千二百人内四百人ハ仏の先鋒



○仏將  
 ラドレー  
 勇戦  
 討死

將軍「ゼネラル」ジエクローグ手「陥」りたりとど  
 再説「仏國」の大統領「ゼネラル」ドロシエハ此度の「一戰」是非  
 とも雌雄と決せんと極めたり「ジエクローグ」猶その機會を得ざり  
 て空しく「巴黎」府内へ「引揚げ」普國方も其後ハ嚴しく攻  
 かけ来らざり日々砲戰の小糴合ひのこあり「十二月」  
 廿日の夜大統領「ドロシエ」ハ急み本務兵市兵農兵の三  
 兵「募り合」して「一百大隊」の人数を「引從」ぐへ再度外郭へ出  
 張「フ」ジヤン城小入り翌廿一日「曉」三時小先鋒の總督「ゼネ  
 ラル」ピノア「ゼネラル」ジエクローの旗下の將卒とをト  
 め諸手の兵隊と操り出「フ」ドロシエハ自身「フ」ジヤン城と

打て出で普國の陣營へ攻かく大いハ戰鬥「開」んとして  
 先敵軍の模様と一見「その」情態を「探」らんと「エタマゼウル」  
 官の者と「引連れ」僅り小三四人少く敵寨近くへ進み往き彼  
 地此地「巡見」たり後多ハ戰所と成るべき四邊を「點檢」さ  
 し居るうち敵如何「し」て是を知りけん夜未だ「明」ざる星影  
 小普國の第一軍將「ウオーグーベン」グ持場の砲臺より一發嘯  
 と響く小驚き「ドロシエ」早く引んとする時續いて大砲小銃  
 張雨の如く「打出」せり爰於て進退究まり引從へて来り  
 たり「エタマゼウル」官の者と共み地上み伏し「潜」り居るう  
 ち味方の諸將「を」れを知り直ち「援」ひ来り彼の砲臺の上

目かけ大砲小銃を打ちけ忽ち地乱戦と成りしう大統領下  
 ロシエもあの間も免とて引揚ぬ最も危き事あり然れバ  
 あの手の砲声を普仏両軍の諸將聞傳え早戦争ハ始まり  
 たるぞ他の軍隊も送るゝ杯言ひ誓り進の喇叭を吹あが  
 吹とて双方とも兵を操り出し出合ひ頭よ戦ひ始まり東方  
 暗雲たふひた明行く空み見渡せば佛普両寨城の間の廣野  
 いたゞ一面の戦地と成りたり時よ仏の一將「ゼネラルブレ  
 ース」普國の第三軍「フレデキツキ維廉」が先鋒隊と渡  
 己合ひ味方苦戦とありたるを護り返し自身銃を採て敵を  
 打撃け大いよ猛威を震ひたりし普軍より打出せ破裂

丸のためふ重傷を受け士卒の助けを得て病院まで往され  
 ど竟ふ命を失はせり

「ゼネラルブレース」が死骸を同廿六日よ巴黎斯府内ある  
 「フレドメー」の寺院に葬り官めく是を執行ありたり

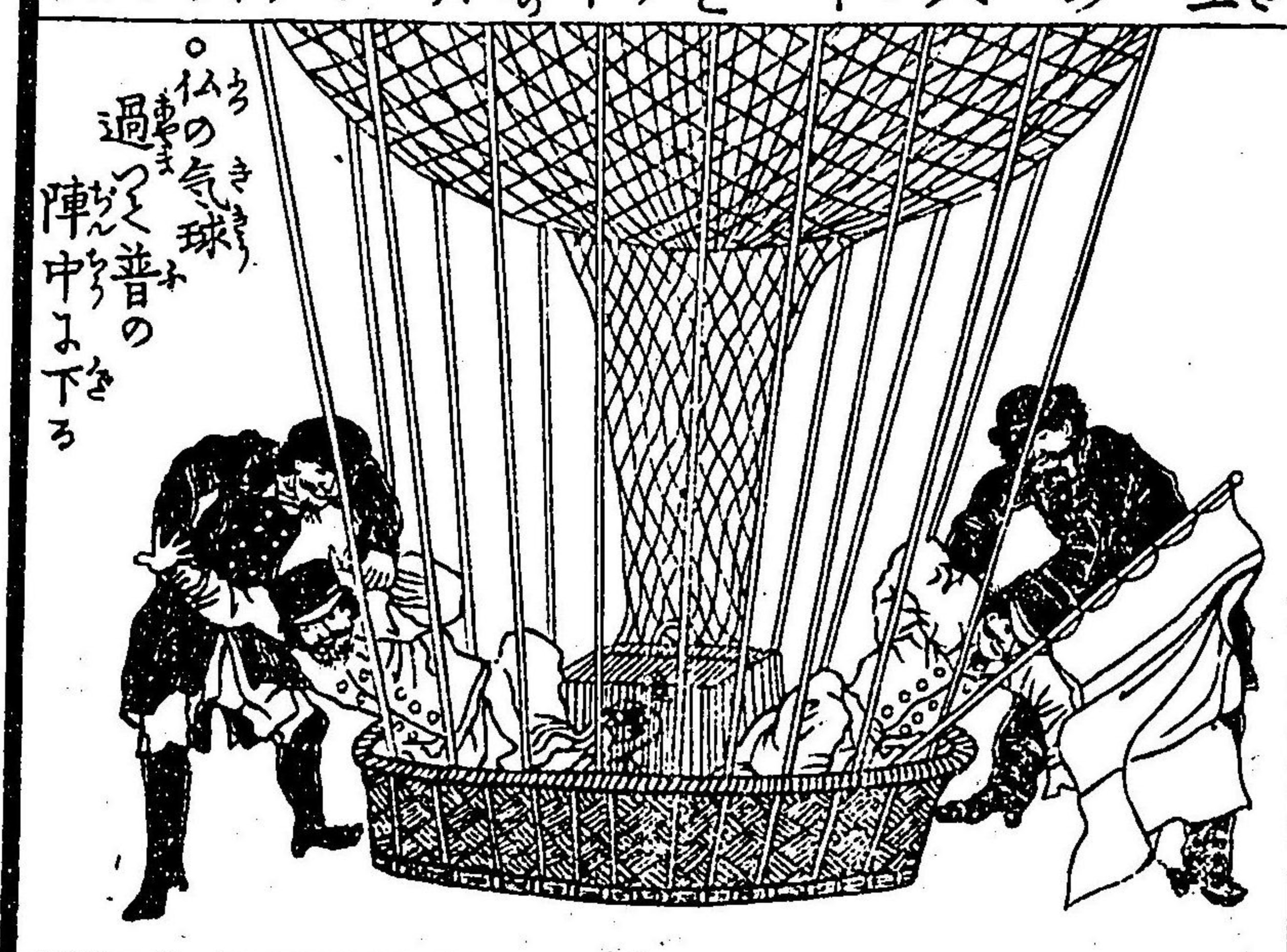
儲まゝ「サンデニー」の地よ於てハ普の二軍將「フレデリツ  
 キ」シャル、グ兵と仏國の海軍隊と時移るまゝ血戦ありま  
 け佛軍次第に旗色悪く既ふ苦戦とあり敗北と見えたる  
 所へ「ゼネラル」シユクローが旗下の一軍隊横あひより援け  
 来り勢ひ猛り討入りたる故海軍隊の將率とつと返り大い  
 小普軍と戦ひたり諸手の合戦勝敗まちくみく雌雄を決せ

ざうらら日既ふ光り夜没一なれば双方とも軍を止め  
 國の大統領「ドロシユ」其終戦地小陣をむた夜の明るを  
 待りける此日の戦争持ふ烈しく西軍の討死手負ハ前ふ  
 倍一と夥ど一同一二十日一敵味方の隊列めるとあひ僅  
 く砲戦あり一のとき劇烈の戦ひみ至らざりき  
 爰ふ普國の謀將「ロスマルク」ハ仏軍の戦力ハの程ふ至り大  
 りみ盛んあるハ急ニ雌雄を決せんと為るものありん實ふ  
 大事の時ある故味方の將士殊励まさん如びと思惟一普王  
 維廉と一書紙認めさせ諸軍ふ布令を出たり其文み  
 曰く

今般我軍出陣以來各國の兵威大いふ奮ハ法軍とどが為  
 小挫折と「メツス」縣落城の日敵の精兵拳と我軍の  
 虜客とあり一佛國その都鄙ふ募り人數を集め防  
 禦の兵隊と編み抗せんとして謀るふ依り人民是が為役せ  
 らし田野荒れゆた國內の者多く飢たる色あり是我が國の  
 求むる処なれども我軍威の振ひ起るより出る者あり敵軍の  
 數ハ我軍ハ勝まりと雖も我軍威の熾ると以て敵の將卒多く  
 虜客とある是我兵士の勲功ハ非おして何ぞや今仏國諸郡縣  
 中大いふ人民を募り兵隊と組ミ地城穿ち臺と築き我ハ  
 抗せんとい然るも我ハ兵向ふ所敵なく砲臺まつく我ハ



かの程追々酷寒の節に至  
 るに野原も屯陣せし者その  
 艱苦言ふべしむ而して兵  
 士も手銃を携へて氷凍の中  
 に立ば其寒気も堪ざるも  
 推して知るべし府内の人民中  
 もは我憐む意ありのの歎  
 の皮及び毛織の類を以て手  
 袋を造り兵隊中も與へば其  
 功德の功も大なるべし若



過つて普の  
 陣中よ下る  
 〇仏の気球

有志の輩も我贈らんと思ふ品物城市街督務も出ま  
 直ちにおもと軍務も達し陣中も送り届けんものあり  
 又二十七日の布令

方今我國興廢危急の日ありおとみ仍て政府の諸官負ふ  
 事務も預る士も今歳新年の禮式一切廢止まこと  
 事

かまじく日の布令

時勢逼迫し薪炭乏しく成りて我以て府内の人民悪業を働  
 き明地屋敷地の圍板を剥くを或は圍内の材木類を奪ひ  
 まし林園中の樹木強竊し小伐り倒し盗と取の徒多し

このことは實に言語絶する所業あり因りて晝夜間断る  
 く市兵を以て巡邏せしめ其惡黨を警へむ若し向後右  
 等の輩ありば直ち捕へて軍務局に送り軍律に從ひて  
 嚴科し處せざんきあり

近頃府内の薪炭乏しく成りし因り過日以來市中督務  
 より令を下し巴黎斯外郭の林の木を伐り出せば差支へ  
 無くその用便せざんきあり

爰も普魯士方より嚴しく巴黎斯の周圍伐り去るに巴  
 黎斯と諸郡縣との通路を鎖し相互の應援断切り而し  
 と巴黎斯へ後詰を為んと人数を催せ郡縣へも早く普國よ

兵を向け逆奇めて是を攻めりち農兵市兵を募る間の無  
 き様ありしに巴黎斯へ應援をさんと企て居たる諸郡縣の  
 兵隊もあひく透巡し別政府とありたるツール縣の如きは普  
 軍近傍まで侵入し来る後以て再度別政府を西の方大西洋の  
 畔ある「ホルダウ」縣に移し内務全權「カンベタ」氏も是に居  
 たり斯の如くも豫て普の謀將「ボスマル」シの見よて「巴  
 黎斯」府内もよく頼を失ひ人心も乱れ内訌と起し籠城水く  
 保つまじ其所以を仏國全州の人民黨を四派に分つ

「レピユブリケン」  
 「ボナパルチスト」  
 共和政度を助くる派  
 那破崙家と助くる派



カールレアニユト

王爾噠候を助ぐる派

王爾噠候と云る

那破崙帝の前の

仙王ルイヒリプの末孫

あり故よ是と立て再び其王胤と相續せしめんと計る徒あり

ロジチニスト

ある派あり

法國古代の王胤を立てんと

レジニストと云るは姓名よ非ぞ一派の黨の名あり

此四派の黨國中み並び競ひて何れも勢ひ制まらざる者の

如し然れども時の得失因りて盛衰興廢あり曩み那破崙帝位

み存りし間他の三派かたるぐ煽動して互ひみ相競ひ特み共和

政度の黨勢ひ盛んみして帝座を覆さんと為しと數回あり故

帝の浮虜とありしを見て直み其勢ひよ棄ぜり然るも今日の景

勢衆も共和政度を罵る者多く他の三派交々相競ふ小至き

り斯の如くもまづ内み兵糧乏しく外み援けの兵ある時豫て

共和政度を欲せざる他の三派の黨その虚み棄てて不平をとり

幾許日あらず破れ生ぜんと必せりこの廟筭あり然るも巴黎

斯府内ハ共和政度を助るの派多きを以て舊城堅固あるのと

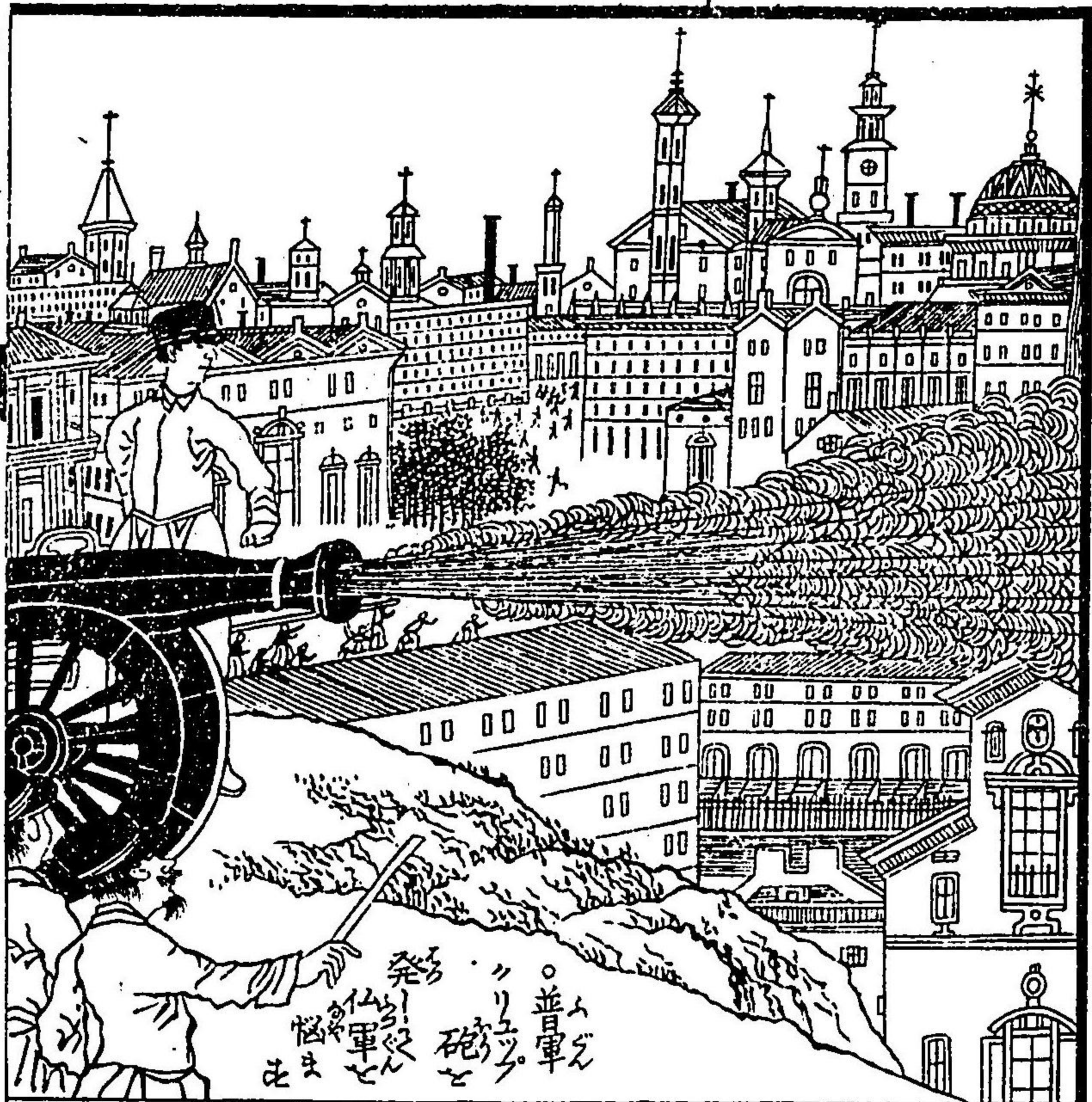
あらず近頃よ至りかくつて數回兵を出し必死の戦争み及び究

鼠却つて猫を噛んと為るの勢ひある故まづ一策を回らし巴黎

斯を早く陥るゝめ周圍の十六城を次めて府内を的と為し

クリエツプの大礮を打ち老幼婦女子として恐怖為さしむる

よの如むと決り「クリエツプの長大礮と幾門とも多く居りたり  
 「クリエツプ礮ハ普魯士國ある「クリエツプと云ふ人の發明ふ  
 て歐羅巴及中陸戦無双の長大礮あり是を設まれば其彈丸  
 二里半のところに達を屢み千八百六十七年今より七年前  
 仏蘭西の巴黎斯よわの博覽會有り「時普魯士より此  
 「クリエツプ礮を出して世界の人の目を驚を膽を冷させた  
 事と云ふ然とバ佛人も鋭く知る所ふと恐怖る「居ると  
 久し此大礮を以て距離遠き地より居り巴黎斯郭外の諸寨  
 城あり「府内と射るとなる「仏國元來諸機械に富れど是  
 小應ずる大礮なり「普將「ビスマルク氏その支張知る故計



策今爰不出  
 然とバ十二月廿七日  
 より翌一月一日の  
 夜まで六日六夜の  
 間「諸寨城へ向つ  
 て射たる所の彈丸  
 まで二萬五千九  
 ありこの一彈丸の  
 重さ十三貫四百目  
 あり故に二萬五千九

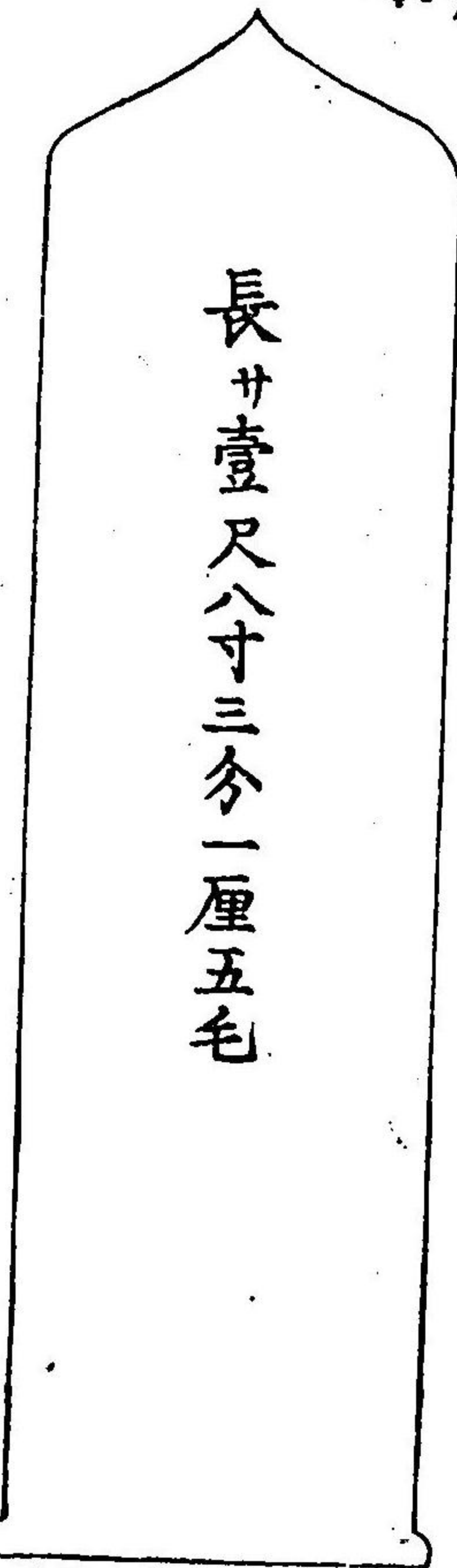
の重さの總高三億三千五百万貫目とある此彈丸は獨乙國より巴黎斯府城外まで運送するに蒸氣車の室二百二十を塞ぐべし此長大礮一発の費金十四圓より二万五千發の彈丸の失費は三十万兩に登ると云ふ

クリップ礮

彈丸

の圖

長サ壹尺八寸三分一厘五毛



クリップ礮の彈丸の圖

この彈丸の飛往力ハ手の脈一ツ打らば二百三十三間一尺ありあれと込入込入射る時ハ一昼夜より一百五十發放つ

と云ふ

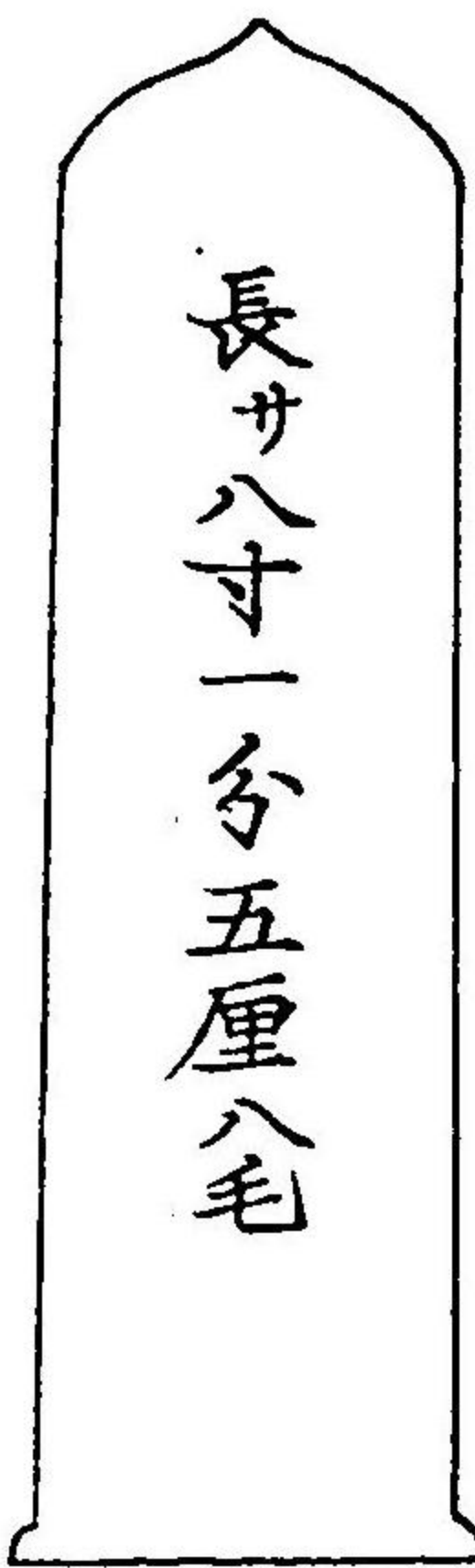
又仏蘭西より近年發明の後裝砲ハ彈丸の貌前同様より矢張旋る條あり

佛蘭西發明

大砲

彈丸の圖

長サ八寸一分五厘八毛



佛蘭西發明の大砲の彈丸の圖

この彈丸の速さると手の脈一ツ打らば二百十一間を飛行し是を射るに彈丸の巢口を放ると後五尺五寸と往間一回轉一手の脈一ツ打らば二百二十二回轉するに彈丸は旋る條あり故より走る力迅速ありよ從て丸の力

の劇烈あると知るべし

然るにバ仏蘭西の大砲よりとらんとども普魯士の「クリエツ  
ポ砲」比較と劣ると遙うある故彼の砲と此砲と接戦  
激発し及ぶとらるる仏軍終よ打瘥められよとみ對ふる  
と能ハむ成りぬ爰よ於る普軍その機を察し計り「シ  
ヤチヨン」と云ふ小山の上小砲臺と築き建彼の長大砲を  
備へて以て初め南の方ある諸寨城へ嚴しく放ちけりた  
りしが仏軍よりも猛烈に應砲しを恐る色なく見えたり  
故後より巴黎斯の府内への砲を向けてぞ射出たり  
歐羅巴カカる近世列國會合の久條約ありたる公法規

則らう守る者城内に楯あり攻る者と兵技んとする  
時別謀計なくその城郭を圍んで砲発させんと欲せば先  
使者を城中に走せ守る者も通を守る者も兵聞き府内  
ある老幼婦女子病者かよび外國の居留人など俄して他  
の地へ移しその難を避しめ而して後攻る者も兵砲  
撃まらば以て軍律中の極めとん

然るに十二月二十七日以来普國の軍勢彼の長大砲を以て  
恣に遠く諸寨城かよび府内の家々と撃ち摧き往來の  
鉄道を反飛し老若男女の差別なく死傷致蒙るりの昼夜  
殊別さば就中彼の爆弾病院のうちに落来ると數回あると

以て院内の病者死傷するの甚多し普軍斯の如く放突  
 攻撃を逞しうするも雖も曾て以前より告来るの法なく一月  
 一日よりハ弥弾丸を飛し暴慢残酷小府内を劇射する  
 故仙人も且罵り怒り残忍の極度ありとも然るる爰  
 小於て仏國の政府衆議の久外務全權一書の廻文を造り  
 普國の者我が都府を攻撃する小臨之軍律公法小據ら  
 ば傲慢残酷の所為多し肯と認めく普く歐羅巴各國の政  
 府小送りしとぞ

法普戦争誌畧小渡氏云ふ余惟ふ小普軍初り自ら  
 國々小巴黎斯藩城の人民一和せざれば日あり小府内攪

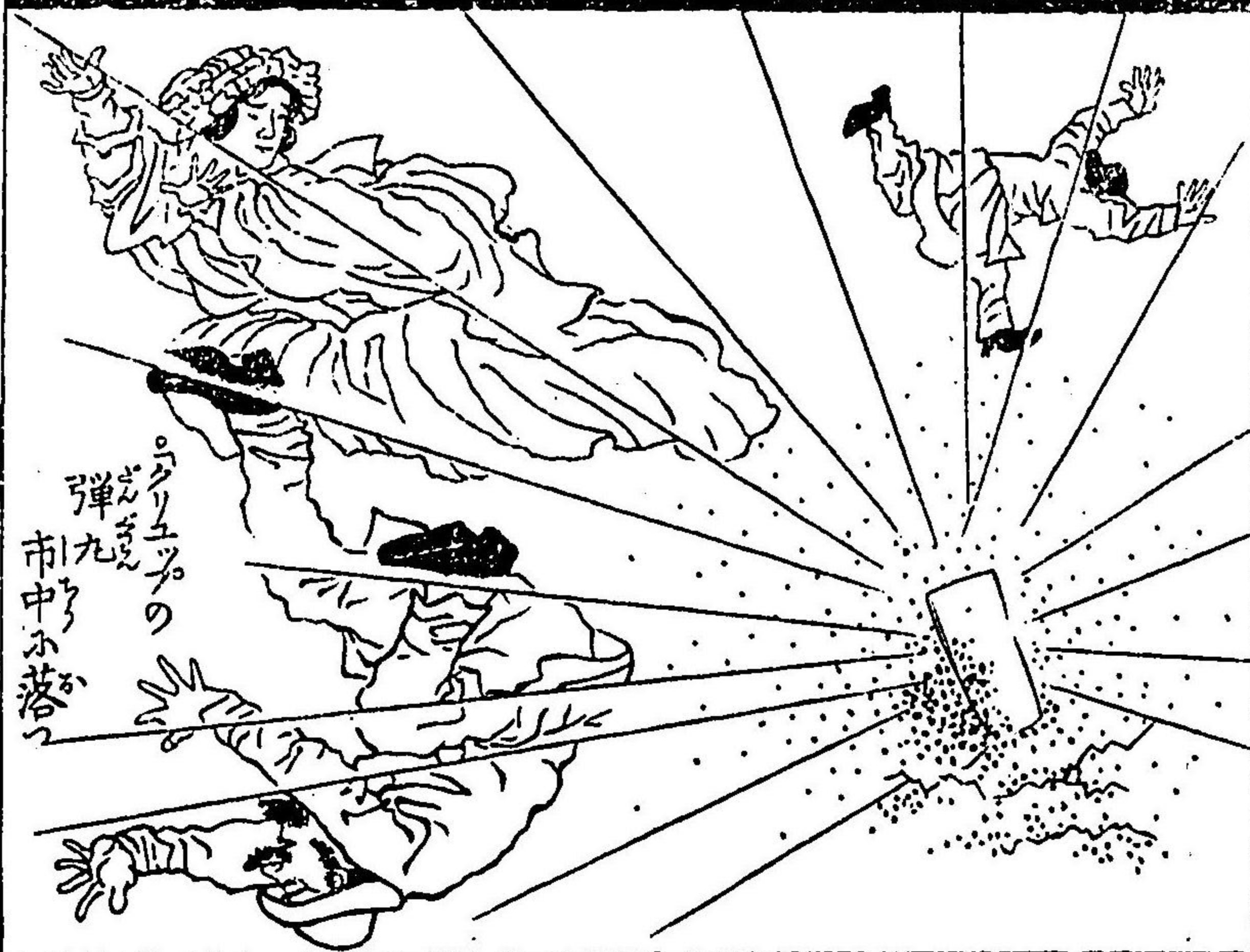
乱し速く小開城せんと然る小今百余日小及び未と其更  
 む一依りて小と後技んよの老幼婦女を其俵めき早く城中  
 の粟を尽させ一後一發震動恰も雷電小拍りき爆丸後以  
 て日夜府内小散乱せしめ第一は婦女子を恐怖させ第二  
 小市人の膽を切やさせ府内破攪乱させ開城を速く小さ  
 せんとの権謀小出るありん然とぞも軍律公法ハ強大  
 ありん頼之犯し破るるくうざるハ固よりあり故小公使の  
 上小於て其所為残忍暴酷と云ふとも又可ありん然  
 とぞも惟ふ小普軍の智勇の良將ありあり豈強大  
 頼之勁暴を示し公法を犯さし爲んや兵力の強大あり

の一宜しく大律を正し勉め公法を守らむ是  
 強者の人を制取する方畧ありむ人若し強大あると頼  
 其法律を漫りふせば何と以て是公法大度を施す  
 や然りと雖も今日歐羽の事情強勇ある者ハ必むも舊法  
 古約を主とせざる其為るところ推道不出て百戦百勝の後隣  
 藩を裂き土地を併せ勢ひより依りて規則を設けんと暴  
 那破崙の普小向ひく兵を挙げ軍を起すの理其律奈何ん  
 余輩が一小生を以て之を視せば傲慢嫉妬の強暴も出る  
 外も今仙国らの莫を以て歐羽の各政府より廻文する意  
 ハ他日督責公論の一種殖植る者然れども惟ふ天下

の公法一日り廢まざらば歐羽の人常々文明開化を守  
 内み誇る其意法律を尊び強大を以て恣に暴酷他  
 加へざるの謂ありん然らば今仙國軍使を馳せ普の本  
 陣み遣り其非を算へて其過失を責め二国各法律を犯  
 さば公明と以て快く戦争と遂て可ありん二み巴黎  
 斯府内より各國の全權在勤し其府内より居留する我  
 国民の生命を預ると無数あり然るも此外務全權は普  
 軍の殘暴と遅らふ公法規律を犯すと徒らふ黙視傍觀  
 まるの謂ありし然れども今日の勢ひ列国の衆權手  
 拱ぬる是を責るの色あだの強者とて其非と遂げ去

ある者と云ふべし

再説普軍ハ彼の長大礮を以て劇發し彈丸多し日々激烈しく  
 市人は是が為小殪るもの幾人とりよとを知らざれば仏人頻りみ  
 憤怒して數回戦ひを接ゆると雖も普軍の長大陣の間み威く  
 備へをまゝ砲臺胸壁の設け嚴重あるに恰も城郭に向ふが  
 如くありて容易ふ功と奏し難く爰を以て大統領「ドロシユハ  
 先達てより郭外の諸寨城へ往来し謀慮を尽さんと雖も更み  
 その詮あると悶へ今一戦しと彼が動靜を試さんと一月十九  
 日普の一軍隊ある將帥「ウオウグウベン」陣取りたるハベル  
 ゼリーの丘に向ひ曉三時より外寨「モンパレリアン」發し



弾丸の  
市中に  
落ち

左翼の一軍ハ「ゼネラル」ビノ  
 アーと將と中央の軍隊ハ大  
 統領「ドロシユ」及び「ゼネラル」ブ  
 ラマル指揮し右翼の一軍ハ  
 「ゼネラル」ジユクロー是れ將と  
 しく攻め血戦終日劇烈に  
 ちて勝敗決せ暮に至り諸手  
 の兵と引揚ぬ敵味方の討死手  
 負の山を多し此日仏將「ゼネ  
 ラル」ブラマルの陣前みかて

醫師の長官「シカンヌ」と云る人弾丸雨の如き中ふ立て手  
 負の人を助け送ると指揮あり居たり「セネラルブラマール」を  
 醫官が弾丸ふ瘡とを恐れ醫師早く此地を引退足下の  
 居る所よあつと声うけしに醫師答へ云ふ戰場傷者のあ  
 る地の總て我が居る所ありと言放つて自若とれば人皆その胸  
 中の大丈夫あると感賞せしとまん  
 然れば仙軍日々兵を出し戦いと挑めども普軍却つて陣營  
 死守り鉄氣と遁るを旨とみ一市中へ向ひて発砲すること專  
 要とありたる故今止難く巴黎斯に在留し居る歐羅巴各國  
 の外務全権より普國の宰相へ一書と贈り軍律み背くの由と

云ひ遣りし彼の謀將「ロスマルク」是ふ答ふるに仙國の行き  
 届くざる旨と以て砲撃一陪猛烈あり

當時佛人の普國へ囚虜とありて居る者四十万人と登り獨乙  
 國中の諸寨城小置餘り城以てその程仙國內ある「メッス」縣の  
 城内へ移す者凡一万四千人と言ふ而して囚虜と成りし者も  
 金銀細工或ひは玉石細工する大工左官と夫々固有の職  
 業と為し農民もて牛業もたのめ日雇人足を勤め一日銀  
 十四五匁の手間賃を取りたり

まさ先達て一月一日より獨乙國に囚虜とあり居る仙蘭西  
 帝那破崙同一囚虜と成りたる四十万の我が國人へ一人ふつた



金三分と十本入の巻煙草一把と贈りたりとぞ  
普の軍中へも此の頃その都府伯灵より贈り物来りフラスネ  
ルの襦絆三万四千枚毛織の靴足袋二万五千足フラスネルの  
腹巻布二万五千筋フラスネツト二万五千枚又七月十六日  
普軍出陣後より十二月三十一日までこの間獨乙國より陣中の  
兵士に贈る書翰の數六千七百六十万紙ふりて日誌を送ると  
百五十三万六千冊及びと言ふまゝ出陣以來兵士へその親  
族より贈る所の金總あめり四千百万フラスネふりて外に猶  
五万金の包と物と送りたりとまん  
佛國へも討死の人及び痲人の見舞と一と日本横濱在住の

仙人より五万フラスネの金を送り英吉利の倫敦府在住の仙  
人より兩度ふ十万フラスネの金と贈り埃地利の維也納府在住  
の仙人より五万フラスネの金と贈りたりとぞ  
あの節仙國も普國へ掠り奪てまゝ一地全初八十九縣の内  
二十五縣ふりて國中三分の一を普軍の爲に落陷せり  
巴黎斯府内より切迫し平日馬車に用ゆる馬八万疋あり  
を先達てより多く食ひ今ハ二万二千疋上らば又平日ハ市中  
に往返する者の用ゆる小馬車三万以上ありがあの節五百  
輛ふ至り一ハ食馬を屠り尽せし故とぞ又犬猫鼠をもち七八  
分ハ食ひ尽しなるより因り何れも高直ゆく大犬の股の肉一

一兩二分二朱猫一匹一兩二分一朱鷄卵一ツ一分二朱  
然して是とを容易よみ入り難く成り往り  
斯て巴黎斯府内食糧いよく冬き一月の未箆城百三十日近  
至りて多人皆飢餓の色を現ハ一老幼婦女子途よさるよひ痛  
哭の声巷よ売り爰ふ於る城兵ら漸く勇氣撓み折け一月  
廿六日仙將「ナエル普の本陣」ウエルサヘルみ往き和睦の談話  
始り翌廿七日み至り休兵の約整ひ夜十二時より兩軍の砲發  
止と續いらく仙國前營の諸軍あひく府内へ引揚ぬ  
時小府内の奸商ら竊る小貯へ置き高利を貪らんと計り  
食料の乾酪鷄卵鶏肉兔肉豚肉の類ひと急し市中へ出して賣

拂ひが價一昨日まきの三分の一ふ下り或ひは半分ふ至ら  
ぬゆり是は近日鐵道の修復出来諸郡縣より食料の品々  
茲府内ふ運び来まば相場の下落ふ及んことを思ひて多り奸  
商の奸利を計る何との國も僉同し  
始り一月廿八日休兵の談話より二月十五日まで小戦和の換  
撥為まなき苦のとき諸郡縣の議論ましくあり極らむ猶再  
三日延をせし二月廿六日畢み和睦の條約定り  
佛蘭西領の内「アルザッス郡及び「ローラン郡」の一分縣を  
獨乙國ふ附属せしめ  
償金五十億百万「フラン」の内十億百万「フラン」ハ當年中ふ

出<sup>し</sup>残<sup>り</sup>四十億百万フランハ三ヶ年の間<sup>も</sup>皆納<sup>す</sup>  
 と事<sup>も</sup>極<sup>ま</sup>る<sup>る</sup> 仏兵<sup>の</sup>巴黎斯<sup>に</sup>小籠<sup>る</sup>總<sup>て</sup>七十万<sup>に</sup>及<sup>び</sup>城<sup>郭</sup>外<sup>に</sup>  
 小配<sup>る</sup>大砲<sup>千六百五十門</sup>小<sup>に</sup>其<sup>砲</sup>何<sup>れ</sup>も巧<sup>に</sup>極<sup>め</sup>城<sup>郭</sup>  
 郭<sup>も</sup>萬<sup>國</sup>無<sup>双</sup>と<sup>も</sup>言<sup>つ</sup>べ<sup>し</sup>然<sup>り</sup>と<sup>り</sup>久<sup>し</sup>も百三十餘<sup>日</sup>の  
 籠<sup>城</sup>後<sup>つ</sup>ひ兵<sup>糧</sup>尽<sup>く</sup>出<sup>て</sup>和<sup>議</sup>乞<sup>ふ</sup>畢<sup>る</sup>古<sup>人</sup>の所<sup>謂</sup>兵<sup>の</sup>  
 勝<sup>敗</sup>人<sup>は</sup>在<sup>る</sup>兵<sup>器</sup>非<sup>ぶ</sup>と<sup>い</sup>此<sup>竟</sup>あ<sup>ら</sup>ん實<sup>に</sup>佛<sup>國</sup>未<sup>だ</sup>  
 曾<sup>有</sup>の汚<sup>辱</sup>を蒙<sup>り</sup>も那<sup>破</sup>崙<sup>が</sup>達<sup>策</sup>よ<sup>う</sup>出<sup>る</sup>所<sup>と</sup>い<sup>言</sup>  
 る<sup>る</sup>果<sup>して</sup>時<sup>運</sup>因<sup>る</sup>の<sup>う</sup>

巴黎斯<sup>に</sup>籠<sup>城</sup>の始<sup>り</sup>より一月廿七日ま<sup>で</sup>百三十二日<sup>の間</sup>小<sup>に</sup>府<sup>内</sup>  
 内<sup>の</sup>器<sup>械</sup>所<sup>に</sup>製<sup>造</sup>せ<sup>し</sup>大<sup>砲</sup>の九<sup>数</sup>二十五万九<sup>千</sup>三<sup>百</sup>三<sup>十</sup>ラ

イユースと号<sup>け</sup>十五連<sup>砲</sup>三十五連<sup>砲</sup>の九<sup>数</sup>百万<sup>餘</sup>よ<sup>う</sup>  
 登<sup>り</sup>と<sup>ぞ</sup>

佛<sup>國</sup>軍<sup>費</sup>金<sup>去</sup>年<sup>七</sup>月<sup>十</sup>四<sup>日</sup>兵<sup>端</sup>と開<sup>く</sup>の<sup>日</sup>より今<sup>一</sup>月<sup>廿</sup>八<sup>日</sup>  
 巴<sup>黎</sup>斯<sup>府</sup>開<sup>城</sup>ま<sup>で</sup>三<sup>十</sup>億<sup>百</sup>万<sup>フ</sup>ラ<sup>ン</sup>も<sup>も</sup>仏<sup>國</sup>敗<sup>軍</sup>小<sup>に</sup>  
 き獨<sup>乙</sup>國<sup>へ</sup>出<sup>す</sup>所<sup>の</sup>償<sup>ひ</sup>金<sup>五</sup>十<sup>億</sup>百<sup>万</sup>フ<sup>ラ</sup>ン<sup>去</sup>年<sup>戦</sup>争<sup>起</sup>  
 る<sup>日</sup>より今<sup>日</sup>戦<sup>ひ</sup>畢<sup>る</sup>ま<sup>で</sup>仏<sup>全</sup>國<sup>の</sup>商<sup>法</sup>及<sup>び</sup>諸<sup>税</sup>の損<sup>耗</sup>  
 の高<sup>一</sup>ヶ年<sup>積</sup>りあ<sup>り</sup>て十<sup>億</sup>百<sup>万</sup>フ<sup>ラ</sup>ン<sup>此</sup>總<sup>金</sup>高<sup>九</sup>十<sup>億</sup>百<sup>万</sup>フ<sup>ラ</sup>  
 ラ<sup>ン</sup>小<sup>に</sup>登<sup>り</sup>仏<sup>國</sup>一<sup>ヶ</sup>年<sup>に</sup>收<sup>納</sup>する<sup>金</sup>額<sup>凡</sup>十八<sup>億</sup>四<sup>千</sup>百<sup>万</sup>フ<sup>ラ</sup>  
 ン<sup>亦</sup>然<sup>と</sup>五<sup>年</sup>の收<sup>納</sup>金<sup>と</sup>咸<sup>く</sup>抛<sup>さ</sup>ざ<sup>れ</sup>ば今<sup>般</sup>の失<sup>費</sup>  
 金<sup>を</sup>償<sup>ふ</sup>べ<sup>く</sup>又<sup>戦</sup>争<sup>中</sup>仏<sup>全</sup>國<sup>内</sup>の費<sup>を</sup>所<sup>計</sup>り知<sup>る</sup>べ<sup>く</sup>と<sup>ぞ</sup>

是を合されバ仏國あてハ十年間の疲弊と取りたりとぞ

三月六日普魯士王仏國「ウエル

サイル城と發して日耳曼國の

凱陣せりその行装魏々堂々々

り且あどが前後小凱陣する普

の諸將の順序

第一軍將帥「ウオングー

ベン歩兵五十五大隊騎兵五

十六大隊大砲兵三十四隊

巴黎府中戰事治之古き小復



第二軍將帥「フレデリツキシヤル、歩兵九十五大隊騎兵百三

十六大隊大砲兵三十一隊

第三軍將帥太子「フレデリツキ維廉歩兵百二十九大隊騎兵

五十六大隊大砲兵五十八隊

第四軍將帥「サキス王の太子日耳曼北部の軍歩兵九十三大隊

騎兵六十大隊大砲兵五十八隊

第五軍將帥「ゼネラル。マントウヘル日耳曼南部の軍歩兵百

十八大隊騎兵五十四大隊大砲兵五十一隊

第六軍接兵歩兵二十七大隊騎兵十六大隊大砲兵三十三隊

あり

總計 歩兵六百十六大隊 其兵六十一万五千人 騎兵四百一大隊  
 其兵十二万人 大砲兵二百九隊 其兵四万五千人  
 總軍兵合せて七十七万餘人ありと云ふ  
 再説巴黎斯府内の人々ハ早く鐵道を修復し缺乏の品々を運  
 輸する爲專一とありこれハ日ありて食料足り瓦斯足り漸く  
 以前の巴黎斯ハ戻り爰於て衆人議論し其の度の戦争  
 大統領「ドロシユ」が切薄きと以て全國中の入札人望「チエー  
 ル」氏に歸し「チエール」を挙て大統領とあり「ドロシユ」を元  
 の「セネラル」官に戻りたり  
 此戦争小依りて巴黎斯府内大ハ荒とさるる猶彼の激徒の

爲ふ乱暴を受けのよく破損所多しといふ是を他邦の都府  
 小比ふれば家居の美兼道路の清潔多し全世界中も類ひ  
 無るべし故ふ其記すまき支澤あれども際限ありざれば仏  
 國の部ハ暫時此所小置き筆を英吉利に轉じて彼の首府倫  
 敦とせり他の高名ある都府或いは港の市街の一二を掲げ  
 又其の國の風俗人情居室の模様その他何れとなく序ふ  
 順ひ書出んと爲るよ六帙の措數既よ尽たすバ第七帙の卷  
 小譲りぬ

西洋新書六編下終

官許 明治七戌第三月

瓜生政和先生著述

橋本玉蘭齋畫

江藤喜兵衛發兌

